2009 年度　学位論文概要　　B0866997 北村さやか

女性と Development－「発展」と「開発」の視点から

Women and “Development”― the matters of subjectivity

Development という語は、本来「発展」という自動詞的用法が中心に用いられていた。だが、1949 年以降、「開発」という他動詞的用法が中心に使われるようになり、今も広く浸透している。現在では、貧困問題や途上国の「発展」のために「開発」はなくてはならないものだと一般的には考えられている。しかし、この「開発」の考えに異論を唱えるアマルティア・センや鶴見和子らは、「発展」の視点から、途上国や貧困者が、彼ら自身の「発展」の主体となることの重要性を主張した。従来の「開発」の視点では、「開発する側」が主体となって、途上国や貧困者の「開発」が行われていたが、センや鶴見は、当事者である彼らが主体となり、彼らの手によって「発展」を遂げることは可能であるということを強調している。

そして、途上国や貧困者の中でも、特に女性は、development の対象からも、その「主体」からも遠くかけ離れた存在であると考えられてきた。しかし、女性を対象とした「開発」が行われるようになった現在、「女性と development」の領域においても、development の「開発」と「発展」の区別の問題、「主体」は誰なのかという問題が存在している。そのため本稿では、「女性と development」の問題で、これまで明確に区別して見てこられなかった「開発」と「発展」を意識してみていくこと、「主体」は誰であるのかを考えることで、何が見えてくるのかを探っていった。

その方法として、まず、「女性と development」の領域に関して国際社会で行われた様々な議論、特に第 1 回から第 4 回までの「世界女性会議」の流れを追い、「発展」の視点から再考察を行った。次に、「女性と development」の領域で実践された様々な取り組みである、「WID アプローチ」、「GAD アプローチ」、そして「エンパワーメント・アプローチ」を分析対象とした。ここでは、「誰が主体であるのか」という視点から、それぞれのアプローチを検討した。国際社会における「女性と development」への取り組みと、WID から GAD アプローチへの流れは、「開発」視点が中心で、真の「主体」が誰なのかという視点は抜けおちてしまっている。その結果、「エンパワーメント・アプローチ」という「発展」の取り組みを「開発」の枠組みでとらえようとする現在の GAD では、限界があることがわかった。しかし、このような流れの中でも唯一、「エンパワーメント・アプローチ」は「発展」の視点に基づいていることが明らかになった。その「エンパワーメント・アプローチ」を実践しており、途上国のローカルレベルで女性の「発展」に取り組んでいる例として、インドの女性組織 SEWA の活動を取り扱った。